報告と所感

ロアリズ博士を迎えて

日高第四郎

一

Joseph Albert Lauwerys 博士は、ロンドン大学の比較教育学教授兼同大学教育研究委員会の議長であり、イギリス第一流の教育学者、ヨーロッパ及アメリカで著名な比較教育学の権威者である。博士は元来化学及物理学を専攻され、のちに科学教授法に多大の経験を積まれ、さらにユネスコの教育顧問として活動せられたばかりでなく、第二次世界大戦後は比較教育学の立場から教育視察調査及研究の為諸国を旅行すること四十を越え、その広い視野と深い学殖と高い識見を以て尊敬されている。

このことは、九州大学教授、同大学比較教育文化研究所長平塚益徳氏が今年春、ドイツ・フランス・イギリスに出張して、親しく同博士と懇談する機会をえ、帰朝後その報告の内に語られたところである。その後平塚教授の熱心な交渉とブリティッシ・カウンスィルの力強い斡旋により、同博士をわが国に招聘する望が強くなったので、ＩＣＵも之に協力せぬかとの勧誘をうけた。われわれは本年六月にはハーヴァート大学の教育学教授 Robert Ulich 博士を招聘することに内定していたのであるが、不幸にして同博士の病気の為中止の止むなきにいたったところでもあるので、合議の結果、ロックフェーラー財団の援助による「民主主義教育の哲学的基礎」の研究課題の進展に資するために、この企画に喜んで参加することにした。

ロアリズ博士は九月初旬東京に来られ、直ちに九州に向い九州大学主催の諸種の教育研究会において、教育者、教

育学者を対象に講義並に討議をなされて約四週間を費し、続いて京都にも両三日立寄られ、その間視察及講義を行い、十月十一日夕再び東京に来着、翌十月十二日（金）より満二週間本学主催の教育研究会に特別講師として尽力され、二十六日には東北大学における講演のため仙台に赴かれ、三十日（火）夜の日航機で香港印度等を経由して帰国の途に着かれた。

○博士の本学関係の活動は大要次の通り。

十月十二日（金）午前十一時—十二時。教会堂にて。

Convocation—Socialism and Education in England.

同日午後一時—三時。会議室にて。

Socialism and Education in England の続き。

十月十三日（土）午前九時四十五分—十二時、

Socialism and Education in England.

講義の補足及質疑応答。

十月十五日（月）—二十日（土）毎夜六時—九時。

千代田区霞ケ関、虎の門霞山会館にて。

「公開教育研究会」ＩＣＵ教育研究所主催。

対象—教育者、教育学者、教授、その他教育関係者。

主題—**Morals, Democracy and Education.**

十五日（第一回）　**Introduction.**

十六日（第二回）　**Custom and Law.**

十七日（第三回）　**Equality.**

十八日（第四回）　**Resson and Science.**

十九日（第五回）　**The Individual and the Community.**

二十日（第六回）　**Freedom and Harmony.**

・毎回の講義、質疑応答並に討議は平均三時間。

十月二十二（日）　午前十時—十一時。

本学視聴覚教育センター視察懇談。

午前十一時—十二時　学生有志と面談。

午後一時—三時　小島教授担当の「民主主義教育の哲学的基礎」に関する質疑応答、研究批評。

十月二十三日（火）午前十時—午後二時三十分、国際文化会館にて。「民主主義教育の哲学的基礎」の研究続行一応終了。

同日　午後六時―九時、霞山会館にて、
「公開講義」Economic Progress through Education.
民主教育協会主催、本研究所後援。

○その他博士の東京における活動

十月二十日（土）午前十一時
日本放送協会の依頼により、斎藤勇一氏の通訳を介して博士は「民主主義と教育」に関して日高との対談を吹込み、十一月三日（文化の日）午前七時三十分―八時、NHK国際教養大学の一環として放送された。

十月二十四日（水）午後五時三十分―八時。
京橋丸善、ブリティッシ・カウンスィル図書室にて。
講演、The Purpose and Function of a University.

さらに博士は、自由学園、文部省、日本女子大学、東京大学教育学部等よりの依頼に応じ、講演、視察、意見交換等をさかんに行われ、ほとんど疲れを知らざるものの如くであった。ここにこの間の博士の御骨折に対して心からなる感謝と敬意を表する。

二　ロアリズ博士を迎えて

博士は国際理解に対する強い関心をもち、来日以来日本人及びその伝統風習雰囲気に親みをよせ、若者の如き好奇心を以て、例えば日本の住居、日常生活、食事等を進んで味解しようと努められた。「朗和理数」という名刺を作り、日常の日本語を覚えて、テンプラ屋の親父にもすし屋の出前持にも、「今晩は」「ありがとう」「すばらしいね」などとうちとけて話すなど、まことに気さくな人であった。

講義の態度は極めて熱心周到で、言葉はやや早口であったが機智とユーモアに富み聴く者を飽かしめなかった。

それにも拘はらず、東京における聴講者の数が予期よりも甚だしく少数であったことは、主催者として申訳ない失敗であった。その原因としては(1)なるべく影響力ある有力者を集めようとのねらいで招待の範囲を狭くしすぎたこと。も少し相手を広く考え予め新聞等の応援を求むべきであった。(2)十月としては例年になく天候不順で雨が多かったこと。(3)殆ど同時にトインビー博士、ラーダクリシナン博士等著名な人々

の講演や会合が多かったなども考えられる。

しかしこの惜むべき失敗はとりかえさなければならない。そこでこれらの講演の内容を適当な形で出版してこれを償う予定である。すでにテープ・レコーダーにとったものをタイプライターにうって博士に送り、その訂正を待っている。いずれ著書を通して更に多くの人々が様々の方面でこの碩学から学ぶ機会を作りうるであろう。

博士の講義に列席し、彼との談合の内から私は非常に多くの示唆と刺激と教とをうけた。特に私にとって最も感銘の深かったのは、十八日の Reason and Science という講義であった。逞ましい実践的なアスピレーションを根柢に据え乍ら、理論的には、いかにもイギリス人らしい強靱な合理的実証的相対主義を堅持しつつ、現代民主主義と科学及科学技術との密接不離の関係を論ぜられたのは実にすばらしいものであった。そして応用と実践とを重んじつつ、その根柢に理論的探求の必要を説く堂々たる自信と体験にうたれた。

もとよりここでは、博士の所説の内容を静かに叙述し又は論評する意図はないのであるが、博士との接触によってとり上げられたいくらかの問題を、主観的印象に堕するではあろうが、記念の為に綴っておきたい。

(1) 博士によれば日本に来て到るところで聞かされたことは、「敗戦による精神的打撃」ということである。しかし敗北を喫したのは日本だけではない。凡そヨーロッパで国をなすあらゆる国民は皆敗北の経験者である。イギリス人もまた第一次第二次両世界大戦において極めて痛烈な敗北を経験したのだが、参ったとは思っていない。個人で代表すればチャーチルの様な気性であると暗に日本人を「激励するような言葉」を時々吐かれた。

われわれはこの打撃を決して正当な志が時利あらずして挫折したのだなどと安易に考えてはならないことは勿論であるが、日本人が自己の民族的文化と個性と独立心とその未来の使命とを自ら蔑視するがごとき卑屈さを戒めねばならぬという点ではまことに意味深い警告だと思われる。

(2) 日本の「人口過剰の問題」もしばしばきかされたが、これも日本のみの問題ではない。条件は少しずつちがうが、ベルギーもオランダもイギリスも同様の問題をもっている、

現にイギリスは食料の$\frac{1}{3}$を輸入しなければ生きて行けない。イギリス人は、よりよき社会組織とより多量のより質高き輸出物資を生産することによってこの困難に立ち向っているのである。

(3) 「生産力の問題」、第一の産業革命においては蒸気機関等の発明による産業技術の機械化によって、生産力は飛躍的に増進した。今や原子力産業や電子工業の発達、オートメーション方式の導入等によって第二の産業革命の時代が迫りつつある。第一の産業革命には義務教育の普及が必要であったが、第二の産業革命に処するには、科学的知識の普及徹底と科学的技術の習練体験が必要条件である。しかもこれは先ず義務教育の普及なしには考えられない。日本はヨーロッパやアメリカの先進諸国と同等以上に義務教育には成功している。この基盤の上に科学と科学的技術の教育は可能であろう。

(4) 大学教育の問題

(問) 日本の新制大学はいくつあるか。(答) 昨年の統計によると二二九ある。(問) そんなに多いのか。(答) 正にその通りである。しかし大学の枠には University と College とが含まれているので高等教育機関という方が適切である。(問) ヨーロッパ流に University といわれるものはどの位あるか。(答) 二二九の内約一割位であろう。(問) 新制大学の質はどうか。(答) 旧制に比すれば数が多くなったのと修業年限が一年短縮されたために平均的には質は低下していると言われている。しかし旧制の専門学校に比すれば修業年限が二年延長されたので平均的には質は向上していると思われる。(問) 大学の学生数は総計どの位か。(答) 新制大学出発の際は四十七万五千であったが、昨今は五十二・三万であろう。(問) 毎年の卒業生数はどの位あるか。(答) 昨年の卒業生は一二万七千人あった。(問) そんなに多数の卒業生を日本の社会は消化しうるのか。(答) そこが大問題で昨年は本人の好まぬ職でもあればよい方で、二〇%から二五%は無職だろうと言われている。(問) 失業した知識階級はどうなるか。(答) それが日本の社会の重大な危険な問題になると思う。(問) 「大学教育の種別は」どうか。理工系の学生数は全体のどの位か。(答) 現在の日本の大学は、法科経済科商科等が圧倒的に多く、理工系の学生は全体の二五%にも

達せぬかも知れない。

(5) 「国の教育政策」はその国の産業経済の条件と睨み合わせて立てなければならない。南アメリカやアジア、アフリカの諸国は先ず義務教育を充実して文盲をなくさなければ望んでも出来ないことであるが、日本は世界で最も文盲の少ない国であるから、基礎科学とその応用技術の教育は、やろうと思えば出来る筈である。とりわけ理学一般と工業技術の教育は、生産力の原動力であり、最も必要な生産的投資である。

イギリスもこの点で大いにぬかっていたことを自覚して、科学者と技術者の養成の為に、本年の春理科系及工業技術専門学校の卒業生の数を今後五ヵ年に五〇%増加する計画の下に、それに要する建物施設に、政府は一億ポンド（約一千億円）を支出することに決定した。博士はこの話と連関してアメリカ及びソ連の科学者技術者の養成問題を紹介して、日本もまたこの点を真剣に攻究して対策を樹てる必要はないかと忠告された。

戦後の教育改革において、日本の産業経済社会等の現実的条件に照合した教育政策の欠けていることは私の平素からの憂いていた点であるが、丁度この点を博士に鋭く指摘されてまことに痛い批判であり、しかも好意あふるる適切な勧告であると思った。

(6) 「生産の分配の問題」

生産力の発展と国民の生活水準の向上は望ましいことには相違ないが、その為の失業問題はどうお考えになるかとの私の問に対して、博士は、人々が筋肉労働から機械を操作するよう頭脳的労働へ移行せねばならぬという基本的動向を認識する限り、その発展過程における職場の転換問題に伴う若干の摩擦は国民が協力してこれに打克たなければならぬであろう。たとえば道路の改修新設等は社会的には失業対策になると同時に、産業的には生産的投資事業でもある。とも角、この第二の産業革命の趨勢に適応し得ざる国民と社会とは、畢竟落伍せざるを得ないであろう。現にペニシリン、テレヴィジョンの原理、ジェット機はイギリス人が考え出したのであるが、これを生産するに十分な科学者、技術者の不足の為に、今はアメリカから逆輸入しているのである。オートメーション等の高度の機械的技術化による生産力の増大は、イギ

リスでは、企業経営の公共性の認識、人事管理、賃金制度、税制改革、社会保障制等、「社会科学的技術」によって、一部の搾取に奉仕せざるよう種々の努力が払われている。イギリスには、生活に窮するという貧乏人は今はあとを絶っているという話であった。

(7) 科学及科学的技術による生産力の開発という博士の所論を傾聴同感しつつ、同時にこの公共的な生産力を決して誤った目的に使用せざる善良真実にして節操ある強い人間の育成——神への敬虔と人道への忠誠を堅持する人々の養成なくしては、これも亦滅びの道に通ずるであろうと考えた。

かかる新しき教育政策は、わが国においては誰が、いかなる機関が中心になって考究し実践に移すべきか、政府か、文部省か、経済企画庁か、中央教育審議会か、政党か、国会の委員会か、等々考えてきて、その実現の可能性について一抹の寂しさを感ぜざるを得なかった。

しかしこれは、人口過剰になやむ日本の民族の前途の暗雲を払い、われわれが特にアジアの人々のよき隣人となる為には、誰かがどこで真剣に取組まなければならない課題であると思うのである。

この「報告と感想」とをおわるに際して、諸種の研究会の実施の為に尽力を願った人々、特に事務の担当を願った守谷教授と、通訳の為に毎夜特別の労をとられた斎藤勇一氏並に博士の接待に特別御尽力下さった民主教育協会の宮崎ヒロシ氏に厚く厚くお礼を申上げます。

一九五六年十一月三十日

第一号目次

巻頭のことば

ICU教育研究所設置の趣旨とその課題……日高第四郎

研究論文

教育哲学についての一つの主張……小島軍造
—教育の機会均等の問題に連関して—

エロスよりアガペへ……秋田稔
—キリスト教教育原理研究への一つの序説—

日本におけるキリスト教教育原理の問題の一齣
—教育と宗教の衝突論争をめぐって—……武田清子

アメリカ合衆国の歴史教科書に表われている日本と日本人の取扱い……高木とり